

## 六 まとめ

浄土真宗寺院では、近世に入ると、本山が信仰を中心とした民衆の力をもとに、幕府と関わりを強くして庇護を受け、本堂を中心とした宗教施設群と、対面所を中心とした住居施設群の二つに分けられた伽藍を整備し、巨大化していった。そして、地方の有力寺院も、本山だけでなく藩との関わりを強くして同様の方向へ歩んでいく。善徳寺もまた、民衆の力と加賀藩との関わりと庇護によって現在みられる大伽藍へと成長してきた。

今回、詳細に建造物や痕跡の調査を行い、絵図や古文書等と照らし出したことにより、寛政期や宝暦期には敷地も広くはなく、大きくもなかった伽藍が、嘉永期に加賀藩との繋がりをもち、その庇護により式台門や式台の間、奥座敷などの拡大や大改修を行って幕末期の大伽藍を築き、その後、多くの参拝者を得て、善徳寺会館、研修道場や香部屋を整えて大伽藍を維持してきたという変遷を読み取ることができた。浄土真宗地方有力寺院の近世期の傾向を裏付けることができ、大変有意義であった。

伽藍や本堂については、県内、中部地方の浄土真宗寺院との比較も試みた。昭和五二年度から平成二年度にかけて、国庫補助事業として全国各都道府県で近世社寺建築調査が行われ、報告書が刊行されている。この報告書は各都道府県ほぼ共通した体裁で作成されており、管下の各宗派の近世社寺建築の特質について、本堂を中心に、種類・時代・建築類型などが整理されているため、善徳寺と同時期の浄土真宗寺院の比較を行うことができた。

中部地方の新潟県・富山県・石川県・福井県・山梨県・長野県・岐阜県・静岡県・愛知県の近世社寺建築調査報告書と、京都府（京都市・京都市以外）近世社寺建築調査報告書の浄土真宗寺院について調査した結果、各府県について左記の特徴がみられた。

- ・一般末寺と本山の御坊寺院とで規模や意匠が格段に違う
- ・近世中期から幕末にかけて大型化し、外観・内部とも大きな発達を遂げている
- ・本山本堂の影響を受けた造りであるが、少し規模を小さく、細部に特徴をもたせた造りとなっている

これらについて比較すると、善徳寺本堂は特にかけ離れたものではなく、越中の本山格寺院として典型的な造りであることがいえる。

しかし、富山県内の大型真宗寺院においては、規模・意匠については先述のとおり大きな差異はみられないが、建築年代は寛政七年（一七九五）建立の勝興寺本堂（高岡市）や文化九年（一八二二）再建の聞名寺（富山市八尾）など、ほかの寺院と比較しても、宝暦九年（一七五九）と古く、幕末に地方の有力寺院の伽藍規模が大きくなってくる時代の先駆け、といえよう。

本堂以外の建造物については、各報告書において、よほど特徴がある建造物でない限り取り上げられていない。善徳寺の場合は本堂だけでなく、対面所や大納言の間という賓客をもてなす施設がある、ということ、また、地方において本山級の伽藍を整えていることが特徴として挙げられる。北陸には浄土真宗寺院が多いが、他宗に比べて年代の新しい寺院が多く、報告書では個別に取り上げられている件数が少ないため、十分に比較はできなかった。

また、今回の痕跡調査により個別の建造物ひとつひとつについても、建築された時代の歴史的背景や使用目的に適した形式が認められ、価値が高い。

善徳寺会館は建築年代こそ新しいが、古くから存在した寺への参拝者が気軽に立ち寄れる「茶所」の延長にある建物であることが重要で、建てられた時代の要請から、単なる茶所としての機能だけでなく公会堂的役割も果たしている。寺院としての景観に配慮した和風の意匠としており、特に北面の下屋は参拝者が立ち寄りやすいように吹放ちの土庇にして古くからの茶釜が設置されており、先人から引き継いだ心遣いを感じずにはいられない。

明治期に建築された研修道場や香部屋は、一般参拝者や一般僧侶を対象とした宿泊施設であることから、わかりやすく使いやすい平面と機能、各部屋への採光を目的として、当時流行していた洋風学校建築の総二階建て中廊下形式を応用し、和風に置き換えたこの時代を象徴する建築といえる。

新御殿は、洗練された意匠、良質の材料を用いて造られており、座敷から眺められる庭も建物と一体化した、日本の住まい文化を象徴した建築で、明治期を代表する近代和風建築として評価できる建物である。

江戸時代後期から幕末は善徳寺の隆盛期であり「浄土真宗様」として一つの建築様式に定まってもよいような象徴的、典型的な建造物が建築されている。特に山門と式台門は装飾性の強い豪華で華やかな典型的な建築である。これは、一般庶民を対象とした宗教建築であると同時にいかに庶民にわかりやすく受け入れやすいものとするかを考慮し、視覚的効果の強い構造意匠を追求したための建築といえる。同様に本堂においても、室内の位置による格式にとらわれず、民衆が集う外陣を主



体に視覚的効果の強い構造意匠を用いて豪華に装われている。このような外陣空間の考え方は、後に建設された県内各地の一般寺院本堂へ大きな影響を与えている。鐘楼は建物全体が装飾的で、基礎や軸部および軒廻り等すべてにおいて江戸時代後期の最高の技術と意匠を駆使した傑作といえる。

また、建築様式ではないが、本堂廊下においては、複廊形式で廊下同士の境となる中央柱通りは全長にわたって壁で完全に分離されており顔を合わせることもない構造になっている。対面所から本堂への廊下はほかにもあり、当時のそれぞれの廊下の使い方や地位による使い方の違いを知る上で重要な廊下といえる。

江戸時代初期に建築された太鼓楼は県内では珍しい建物で、式台の前に位置していた当初はさらに珍しい太鼓楼門であった。数少ない類似例は、いずれも城郭建築の太鼓櫓を感じさせる袴腰の付いた二重櫓式の外観であり、善徳寺太鼓楼は全く違った特異な形式になる。また、台所門は門としての機能だけでなく大寺院にふさわしい意匠的な長屋門といえる。かつては入母屋造の屋根であったことが判明したので、今以上の姿を呈していたことがわかる。両本願寺にも巨大な長屋門がみられることから浄土真宗伽藍における格式を示すための重要な要素であったと考えられ、江戸時代の貴重な遺構といえる。

今回の調査で、高く評価できる建造物は庫裏と式台・対面所・大納言の間であろう。庫裏は現在の外観正面はいたって質素であり、寺院建築らしさを表現しているのは、柱頂部に付く舟肘木と反転曲線の唐破風玄関程度である。しかし、今回の調査によって古絵図にみられる、梁間が南側へ六間延びて全体で一六間半にもなる巨大な妻を有し、唐破風玄関の南側に中式台が付いていた庫裏が実在していたことを裏付ける数多くの痕跡等も発見された。古絵図にみられる立派な妻飾りの存在は今後の解体調査に期待するが、全国的にみても最大級の庫裏の妻面であったことは間違いない。

その雰囲気を感じられるのが室内の空間である。方四間の土間二室と、方四間の広間四室を主とした大規模な平面、太い柱に成の高い差鴨居で組固められた強固な軸組、日ごろ目にするのではない幅が一間以上もある建具の数々、上を見上げると太い梁で井桁に組まれた豪壮な小屋組など、巨大な室内空間には誰もが圧倒される。切妻造の大きな妻面を正面に見せることは、勝興寺（高岡市）の修理前の台所や後世に建設された瑞泉寺（南砺市）庫裏も行っている。これらから考慮すれば、江戸時代後期における本山規模へのあこがれや近隣大寺院間での競争、そして、民衆を惹きつける一つの方法として台所を巨大化する改修が行われたものと考えられる。

式台・対面所・大納言の間は、今回の調査で特に目を引く。県内はもとより全国的にみても数少ない江戸時代初期における浄土真宗伽藍の重要な接客施設といえる。

対面所は後世の改変により床や違い棚が撤去されているものの、柱に残る痕跡から当初の柱間装置もわかり、九間（このま）を中央に配して周囲に入側縁を廻した平面計画や、数寄屋風意匠の薄板透かし彫り欄間など、当時の対面所を知る上で貴重な遺構といえる。大納言の間も同様で、特に床の間廻りの意匠や見事な虫喰いの柱、金箔の地に大胆な老松を描いた襖絵、優れた意匠の薄板透かし彫り欄間など見るべきものが多い。

小屋組が大きく変わっているので、その点は少々残念ではあるが、軸部はそのまま継承されており価値は高い。江戸時代初期の数少ない数寄屋風書院造として全国的に十分評価できる。

今回の調査によって、伽藍の変遷を追究し、すべての建造物に復原考察と建築的評価を加えることができた。若干ではあるが類例との比較も行い、現時点での文化的価値は再評価できたと考ええる。あくまで目視の調査であり、今後の修理等による解体調査が待たれる事項もあるが、今後、新たな価値づけの一助となれば幸いである。これからの貴重な文化財として適切な保存と活用がなされることが重要である。

